

男長 ひとりごと

(57)

齊藤 讓

イソップ物語の中に、「ありとぎりぎりす」という話がある。この童話は、誰でもが知っているように、働きものとなまけもの話である。講談社が発刊した、イソップ童話の中から、この話をぬき出してみよう。童心にかえって、静かに読んでいただき、遠く幼い日の頃を思い出してほしい。

ありとぎりぎりす

なつが おわって あきがきました。きゆうに すずしく なりました。そのうちに あきも すぎて、ぐんぐん さむく なって きました。きりぎりすが、一ぴきおなかを すかして、さむさに ぶるぶる ふるえながら、ありの いえの とを たたきました。「ありさん、ありさん。わたしに たべものを すこし めぐんで ください。」「きりぎりすさんですね。」と、ありが できてい

いました。「わたしの いえに ある たべものは、なつの はじめから あきの おわりまで、やすますに はたらいで ためた たべものですよ。あなたは、わたしたちが はたらいしていた あいだ、なにを していましたか。」わたしは うたいづけをして いました。と、きりぎりすは いいました。「たのしい うたのまいにちでした。でも、こうさむくては うたえません。たべものを さがす ことも できません。だから、たべものを めぐんで ください。」「すこしだけなら あげましょう。いままで ずうつと うたいづけして いたあなたなら、これからは、おどりつづけたら いいでしょう。」きりぎりすは、ほんの



イソップは
いずこに

すこし たべものを わけて もらいましたが、それだけでは とても くらして いけません。かれがれの こえで うたを、うたつて、よろよろしながら、かぜに ふかれ て いきました。▼この絵本を見ていると、先生や両親がきまつて、こう言ったものである。「陰日向なく一生懸命に働く、ありさんのようになれ。間違

が、「働きアリ」というのは名前からして全員が働き者の印象だが……。▼じつは本当に一生懸命働いている働きアリは二・三割で、あと七・八割は地面をウロウロしている。働いている振りをしていただけだという。これは動物学者の日高敏隆氏が生態研究して発見した「アリの真実」だそうだから、まじめな話である。▼話はまだ続きがあつて、では実際に労働している働きアリの精鋭集団をつくるとうどうなるか。やはりそのうちの二・三割しか働かない。次に怠け者ばかりのズッコケ集団をつくるとうどうなるか。すると締めて？二・三割が働き出すという。▼人間の集団や職場の実際も、案外このアリたちに似ているようだ。「社会の実相」を見せられたようで、ドキリとしたり、ほほえましくなったりする。お祭のミコシだって、半分はぶらさがっている。だから世間が成り立っている。▼だれもやらなければ、あるいはきちんと責任や誇りを持たせてくれれば、怠けアリでもヤル気を起こすという教訓もあつた。いや、つぶさに観察してくれば、怠けているのではなく要領が悪いだけのこと。一生懸命やっているのにウロウロと見えるアリだっていたはずなのだ。▼きょうは振り替え休日ですが、さすがの「会社アリ」も休みだろうが、社会の歯車を止めるわけにはいかない。警察官、消防署員、看護婦さんなど「二・三割」はご苦労にも働いている。「使っているカギはいつも光っている」と言つたのは米国の政治家フランクリンである。



◆◆◆◆
▼金融、証券問題不祥事が、いま経済大国日本の足下を、揺さぶっている。
金余りの企業は、創業時の情熱を失って、本業を疎かにし、マネーゲームという安易な虚業に狂奔している。
将来を担う若者は、3Kという苦を敬遠し、レジャーという楽を追い求め、汗して働くことは、まるで愚者の選択であるかのように冷笑する。
このままでは日本も、二・三割の働きアリさえおろか、「一億総きりぎりす」と化しはしないかと気に懸る。